



東京フィルハーモニー交響楽団
Tokyo Philharmonic Orchestra



chil H.

2021
7



©上野隆文

本日はご来場いただき、まことにありがとうございます
オーケストラの響きとともに広がる＜新しい景色＞を
心ゆくまでお楽しみください

東京フィルハーモニー交響楽団

オフィシャル・サプライヤー

SONY

Rakuten

マルハニ

LOTTE

JP ゆうちょ銀行

公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団は上記の企業から特別なご支援をいただいております。

第140回東京オペラシティ定期シリーズ

7.1 (木) 19:00開演 東京オペラシティ コンサートホール

第956回サントリー定期シリーズ

7.2 (金) 19:00開演 サントリーホール 大ホール

第957回オーチャード定期演奏会

7.4 (日) 15:00開演 **Bunkamura** オーチャードホール

指揮: **チョン・ミョンフン**

コンサートマスター: 三浦章宏

7/1

7/2

7/4

ブラームス:

交響曲第1番 八短調 Op. 68 (約45分)

- I. ウン・ポーコ・ソステヌートーアレグロ
- II. アンダンテ・ソステヌート
- III. ウン・ポーコ・アレグレット・エ・グラツィオーソ
- IV. アダージョー・ピウ・アンダンテー・アレグロ・ノン・トロッポ、マ・コン・プリオー・ピウ・アレグロ

ブラームス:

交響曲第2番 二長調 Op. 73 (約40分)

- I. アレグロ・ノン・トロッポ
- II. アダージョ・ノン・トロッポ
- III. アレグレット・グラツィオーソ (クワジ・アンダンティーノ)
ープレスト・マ・ノン・アッサイーテンポ・プリモ
- IV. アレグロ・コン・スピーリト

主催: 公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団

助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業) |

独立行政法人日本芸術文化振興会、公益財団法人 **ロームミュージックファンデーション** (7/2)、

公益財団法人三菱UFJ信託芸術文化財団 (7/2)、公益財団法人 **花王 芸術・科学財団** (7/2)

協力: **Bunkamura** (7/4)



※演奏中や曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せず
ご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。

※開演間際の入場、再入場・途中入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なるお
席への着席をお願いすることがございます。

※演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。

※終演後、ロビーの混雑を避けるため「時差退場」のお願いをしております。ご協力をお願いいたします。

出演者プロフィール

7/1

7/2

7/4



©ヴィヴァーチェ

指揮

チョン・ミョンフン

Myung-Whun Chung, conductor

東京フィルハーモニー交響楽団 名誉音楽監督

韓国ソウル生まれ。マンネス音楽学校、ジュリアード音楽院でピアノと指揮法を学ぶ。1974年チャイコフスキー国際コンクール ピアノ部門第2位。その後ロスアンジェルス・フィルにてジュリーニのアシスタントとなり、後に副指揮者。ザールブリュッケン放響音楽監督および首席指揮者（1984～1989）、パリ・オペラ座バステューユ音楽監督（1989～1994）、ローマ・サンタチェチーリア管首席指揮者（1997～2005）、フランス国立放送フィル音楽監督（2000～2015。現在は名誉音楽監督）、ソウル・フィル音楽監督（2006～2015）、シュターツカペレ・ドレスデンの首席客演指揮者（2012～）など歴任。1997年に本人が創設したアジア・フィルの音楽監督も務める。

2001年東京フィルハーモニー交響楽団のスペシャル・アーティスティック・アドヴァイザーに就任、2010年より桂冠名誉指揮者、2016年9月に名誉音楽監督に就任。ピアニストとして室内楽公演に出演するほか、アジアの若い演奏家への支援、ユニセフ親善大使、アジアの平和を願う活動など多岐にわたり活躍している。

楽曲紹介

解説=柴辻純子

ブラームスの交響曲

ヨハネス・ブラームス (1833-1897) は、自身の創作に常に厳しい眼を向けていた作曲家である。若い頃は、作品を書き上げてもすぐに良しとはせず、補筆や改訂を重ね、ときには破棄してしまうこともあった。作曲家として名声を得てからも、初演の前にシューマンの妻クララや信頼できる友人たちから助言を得るために試演を行うなど、その厳格な姿勢を貫いていた。

ブラームスは4曲の交響曲を書いたが、第1番を完成させるまで20年以上の歳月を要している。それは、彼の慎重な性格も関係するが、そもそもベートーヴェンの後に交響曲は必要なのかと自身に問い続けていたからだ。19世紀後半、続々と交響曲は書かれる一方、標題付き交響曲や標題を具象化する交響詩が生まれるなど、新しい方向を推し進める動きも出てきた。そうした転換期にあって、途中中断をはさみながら納得のいくまで突き詰めて書き上げた第1番は、ベートーヴェンから強い影響を受けた緻密な構成の音楽となった。第2番は逡巡から解放された情感溢れる音楽だが、その緻密さは徹底され、主題の変容やリズムの扱いまで工夫を施して独自の道を見出した。

名誉音楽監督チョン・ミョンフンは、今年12年ぶりにブラームスの交響曲全曲演奏に挑む。「私にとってブラームスの音楽は、突き破って飛び立つのを待っているような燃える情熱です」とマエストロは語る。それは、ブラームスが年月をかけて到達した交響曲が孕む、内から外へと向かうエネルギーそのものである。続けて、第1番を「力をもったライオン」とも表現する。円熟の時を迎え、さらなる深化を遂げたマエストロの挑戦。厚い信頼関係で結ばれたオーケストラと作り出す熱演に期待したい。

ブラームス 交響曲第1番 八短調 Op. 68

ブラームスは、1862年、故郷ハンブルクからウィーンに移り住んだ。ウィーンでの新しい人間関係や音楽界との付き合いが始まり、活動の幅は大きく広がった。そして『ドイツ・レクイエム』（1868年初演）の成功でウィーンでの名声は不動のものとなり、1872年にはウィーン楽友協会の芸術監督という荣誉ある地位に就いた。中断していた交響曲第1番に再び取り組むのは1876年になってからで、完成するとすぐに演奏したくなったブラームスは、旧知の指揮者オットー・デッソフに初演を依頼した。その初演では、細部に至るまで緻密に構成された音楽に、ロマン派の優美な旋律に慣れ親しんだ聴衆は驚いたようだ。それでも彼の知名度と熱心な友人たちの協力によって各地で演奏され、ほどなくして交響曲として理解と評価が得られるようになった。

第1楽章 ウン・ポーコ・ソステヌートーアレグロ、八短調。ティンパニの連打を伴う緊張感に満ちた序奏に続いて、ソナタ形式の主部は情熱を秘めた第1主題とオーボエの穏やかな第2主題を中心に展開する。最後に序奏の動機が長調に転調して再現される。

第2楽章 アンダンテ・ソステヌート、ホ長調。3部形式の緩徐楽章。ヴァイオリンとファゴットの落ち着いた主題が次第に盛り上がり、中間部はオーボエの魅力的な旋律で始まる。再現部後半のヴァイオリン・ソロも美しく効果的である。

第3楽章 ウン・ポーコ・アレグレット・エ・グラツィオーソ、変イ長調。ベートーヴェン以来の伝統であったスケルツォ楽章に代えて、ブラームスは間奏曲のような優美な音楽を書いた。クラリネットが素朴な主題を歌い、活発な中間部（ロ長調）と対比させる。

第4楽章 アダージョ・ピウ・アンダンテ、八短調—アレグロ・ノン・トロppo、マ・コン・ブリオ、ホ長調。終楽章のみ、力強い表現のために3本のトロンボーンが加わる。暗く重厚な序奏は、ためらいながら進み、長調に転じてホルンの朗々とした響きがこだまする。主部では、弦楽器で堂々と歌われる有名な第1主題としなやかな第2主題が劇的に盛り上がる。コーダ（**ピウ・アレグロ**）は、第1主題の動機に基づく音型の反復で始まり、決然と結ばれる。

[作曲年代] 1876年 [初演] 1876年11月4日 カールスルーエにて、オットー・デッソフの指揮による

[楽器編成] フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部

ブラームス

交響曲第2番 二長調 Op. 73

1877年から3年間、ブラームスは、夏の休暇をアルプスの山々に囲まれた、オーストリア南部のヴェルター湖畔のペルチャッハで過ごした。風光明媚なこの地でブラームスの創作の筆も進み、数々の名曲（ヴァイオリン協奏曲やヴァイオリン・ソナタ第1番など）が生まれた。交響曲第2番もそのひとつで、明るく牧歌的で、親しみやすい旋律から「ブラームスの田園交響曲」とも呼ばれている。

自由でのびやかな雰囲気交響曲だが、長年の苦心の末に完成させた交響曲第1番よりもさらに慎重に組み立てられ、第1楽章冒頭のチェロとコントラバスによる3音音型（レ-ド $\sharp$ -レ）を統一動機とし、全楽章を関連づけて作り上げた。

同年12月30日にウィーンで行われた初演は、大成功を収めた。カーテンコールが繰り返され、第3楽章がもう一度演奏されたと伝えられている。第1番では^{みなぎ}漲る緊張感に戸惑いを隠せなかった音楽評論家たちからも「聴く人の心に温かい陽光を注いでくれる」（エドゥアルト・ハンスリック）と評され、好意的に受け入れられた。

第1楽章 アレグロ・ノン・トロッポ、二長調。開始の3音音型に続いて、ホルンと木管楽器による穏やかな第1主題が現れ、ヴィオラとチェロの憂いを帯びた第2主題がたっぷりと歌われる。この2つの主題を中心に展開していき、冒頭のどかな音楽が再現され、ホルンの息の長い旋律で終結部に入る。

第2楽章 アダージョ・ノン・トロッポ、ロ長調。孤独な内面を映し出すような緩徐楽章。チェロが息の長い、寂しげな主題を奏した後、ホルンが木管楽器の伴奏で甘い歌を歌う。中間部は管楽器の優美な主題で始まり、次第にぎわめく。

第3楽章 アレグレット・グラツィオーソ[クワジ・アンダンティーノ]、ト長調。オーボエの素朴で優しい旋律がチェロのピッツィカートにのせて歌われる主部と、弦楽器が活発に動き回る民俗舞曲風の音楽（プレスト・マ・ノン・アッサイ）が交

替する。

第4楽章 アレグロ・コン・スピーリト、二長調。弦楽器による輝きに満ちた第1主題、朗らかな第2主題はいずれも3音音型に由来する。強弱の対比を明確にしながら豊かな広がりをもって展開し、金管楽器が壮大なクライマックスを作り上げ、力強く全曲を閉じる。

【作曲年代】1877年 【初演】1877年12月30日 ウィーンにて、ハンス・リヒター指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団による

【楽器編成】フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦楽5部

しばつじゅんこ／東京生まれ。桐朋学園大学音楽学部卒業、同大学研究科、および慶應義塾大学大学院修士課程修了（音楽学専攻）。主な研究領域は、新ウィーン楽派を中心とする20世紀音楽。NHK-FMに司会、解説で出演するほか、音楽専門誌等に寄稿。著書に、『オックスフォードオペラ大事典』（共訳、平凡社）、『クラシック作曲家事典』（共著、学研パブリッシング）などがある。



マエストロ チョン・ミョンフン&東京フィル ブラームス交響曲全曲 ついに実現!

2020年2月のオペラ演奏会形式『カルメン』以後、急速に拡大した新型コロナウイルス感染症流行の影響で来日がかなわずにいた東京フィル名誉音楽監督、マエストロ チョン・ミョンフン。2001年にマエストロと東京フィルの関係がスタートしてから20年めのこの7月定期演奏会は同時に、マエストロと東京フィルの実に1年4か月ぶりの再会となります。



2020年2月定期 オペラ演奏会形式『カルメン』
©上野隆文

昨年2月『カルメン』公演の際、マエストロは『『カルメン』のスコアを読むと、深い情熱が込められたオペラであることが分かります。ビゼーのイマジネーションには驚嘆させられます」と語り、その言葉どおり、その深い情熱を客席に届けてくれました。

しかし……その時すでに国内でも新型コロナウイルス感染症拡大のニュースが日ごとに大きく報じられていました。公演直後の2月下旬から、世界中で数多くの演奏会が中止・延期となり、オーケストラが数か月にわたり沈黙を余儀なくされたことは、ご承知のとおりです。

その後もマエストロ チョン・ミョンフンの来日公演は予定されていましたが、感染拡大防止のための渡航制限により来日が叶わず、東京フィルは予定されていた演奏会の内容変更または公演中止の選択を迫られ続けました。それぞれに演奏活動は再開しながらも渡航制限が続き、公演開催を断念した今年2月。マエストロは、自身が「日本の家族」と呼ぶ東京フィルとお客様に向け、メッセージを送ってくれました。

日本の「家族」の皆様へ

前回の来日から丸一年が経ち、皆さんにとっても会いたく思っています。東京フィルハーモニーのメンバーは私にとって日本の家族だとよく言ってきました。2021年は東京フィルと親しくお付き合いして20周年の年であり、今では実に多くのコンサートに来てくださったお客様方も、この家族の一員だと思っています。

昨年、世界は大きな苦しみに見舞われましたが、素晴らしいものは大きな苦しみから生まれると、私は固く信じております。東京フィル、そして日本中の人々が、この苦しみをより強く、よりよくなって乗り越えていかれることでしょう。

近い内に皆様と再会し、音楽への愛を分かち合う事を楽しみにしております。

愛をこめて

東京フィルハーモニー交響楽団 名誉音楽監督
チョン・ミョンフン

離れ離れの日々を経て遂に実現した今回の来日。演目は、オーケストラ音楽の金字塔、ドイツ・ロマン派を代表する作曲家ブラームスの交響曲です。オーケストラを愛する人ならば誰もが一度は……否、何度聴いたかわからないほど繰り返し聴くこの4つの交響曲。何度聴いても、また何度も聴くほどに、新たな感動が湧きおこり、心を深く動かす稀有な作品群。オーケストラにとっても、荘厳にして強靱、時にしなやかに時に神々しく輝き、どこまでも深い表現と揺るぎない技術を求められるこの作品群は、決してひとすじ縄ではない作品と誰もが知っています。

東京フィルは7月と9月の2か月をかけ、3つの定期演奏会場すべてで、マエストロ チョン・ミョンフンとともに「交響曲第1番、第2番」そして「第3番、第4番」を続けてお届けします。マエストロと東京フィルが最後にブラームスの交響曲を演奏したのは2009年。それから12年、オーケストラメンバーも新たな世代を迎え、次世代のサウンドを築きつつあります。短くはない共同作業の年月を経て、マエストロと東京フィルがふたたびお届けする至高のブラームス。どうぞお楽しみください。



©三好英輔

巻末「名誉音楽監督 マエストロ チョン・ミョンフンが語る ブラームス 交響曲の全て」(20ページ)もあわせてお楽しみください。

The 140th Tokyo Opera City Subscription Concert

Thu. July 1, 2021, 19:00 at Tokyo Opera City Concert Hall

The 956th Suntory Subscription Concert

Fri. July 2, 2021, 19:00 at Suntory Hall

The 957th Orchard Hall Subscription Concert

Sun. July 4, 2021, 15:00 at **Bunkamura** Orchard Hall

Myung-Whun Chung, conductor

Akihiro Miura, concertmaster

Brahms:

Symphony No. 1 in C minor, Op. 68 (ca. 45 min)

- I. Un poco sostenuto — Allegro
- II. Andante sostenuto
- III. Un poco allegretto e grazioso
- IV. Adagio — Più andante — Allegro non troppo, ma con brio — Più allegro

1
July

2
July

4
July

Brahms:

Symphony No. 2 in D major, Op. 73 (ca. 40 min)

- I. Allegro non troppo
- II. Adagio non troppo
- III. Allegretto grazioso (quasi andantino) — Presto ma non assai — Tempo I
- IV. Allegro con spirito

Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra

Subsidized by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan |

Japan Arts Council, Rohm Music Foundation (July 2),

The Mitsubishi UFJ Trust Foundation for the Arts (July 2),

The Kao Foundation for Arts and Sciences (July 2)

In Association with **Bunkamura** (July 4)



- Exiting during the performance will be tolerated. If you do not feel well, please exit or enter as you need. However, please mind the other listeners so that they will be minimally disturbed.
- If you enter or reenter just before or in the middle of the concert, we may escort you to a seat different from the one to which you were originally assigned.
- Please refrain from using your cellphone or other electronic devices during performance.
- In order to avoid crowding when exiting the hall, we ask that you exit the hall by staggered times in cooperation with guidance that staff will provide at the venue at the end of the concert.

Artists Profile



©vivace

Myung-Whun Chung, conductor

Honorary Music Director of the Tokyo Philharmonic Orchestra

Born in Seoul, Myung-Whun Chung won the silver medal at the Tchaikovsky International Piano Competition in 1974. After completing conducting studies at the Juilliard School, he served as assistant and subsequently associate conductor to Carlo Maria Giulini at the Los Angeles Philharmonic. Since his appointment as Music Director of the Paris Opera (L'Opéra Bastille) in 1989, Maestro Chung has conducted many prominent orchestras, including the Vienna Philharmonic, the Berlin Philharmonic, and la Filarmonica della Scala. He served as the Music Director of l'Orchestre Philharmonique de Radio France (2000-2015), the Seoul Philharmonic Orchestra (2006-2015) and the Asia Philharmonic Orchestra, which he founded in 1997, Principal Guest Conductor of the Staatskapelle Dresden from 2015.

For the TPO, Maestro Chung was Special Artistic Advisor (2001-2010), its Honorary Conductor Laureate (2010-2016). Starting September 2016, he was appointed as Honorary Music Director. He is active in education for the younger generations and in promotion of peace especially in Asia through a variety of musical activities and serving as Unicef Ambassador.

1
July2
July4
July

Program Notes

By Robert Markow

Brahms: Symphony No. 1 in C minor, Op. 68

For Brahms, the symphony was the apogee of orchestral music. So great was the shadow cast over the nineteenth century by the mantle of Beethoven's symphonies that Brahms spent many years on his first work in this genre, completing it 1876. No other major symphonist had waited so long before offering his first symphony. But on the other hand, aside from Berlioz, Schumann, Sibelius and Mahler, it is difficult to think of another composer whose first symphony is equal in stature to Brahms's. By the age of 43, when Brahms finally brought forth his C-minor Symphony, Beethoven had written all but one of his nine; Schumann had written all four of his; Mendelssohn, Schubert and Mozart were already in their graves; and Haydn was up to No. 60 or so. The premiere took place in Karlsruhe, conducted by Otto Dessoff on November 4, 1876.

1
July

2
July

4
July

After the first Viennese performance of the symphony, the critic Eduard Hanslick wrote that "seldom, if ever, has the entire musical world awaited a composer's first symphony with such tense anticipation." Nevertheless, the symphony had a long, hard struggle, right into the twentieth century, to gain public acceptance outside Vienna. It was considered too dense, turgid, dissonant, ungrateful to the ears, generally too formidable, lacking in melody and too generously endowed with counterpoint.

The difficult time this work had on its road to success might be seen as a reflection of its musical outline – from opening struggle to concluding triumph. The first, mighty bars of the slow introduction (the only Brahms symphony to open thus) herald a work of enormous scope, power and impact. Over a steady, thundering tread in the timpani and basses, two simultaneous lines work their way forward: one upwards (violins and cellos) and one downwards (woodwinds, horns, violas) in a gesture that seems almost to be tearing apart

the musical fabric. Despite its fifteen-minute length, the entire movement is tightly-knit. All thematic, and even transitional material, of the *Allegro* is found in the slow introduction, almost as if this passage had given birth to molecular building blocks.

The “demonic passion, wild energy, harsh defiance and hard, cold, stony grandeur” Walter Niemann finds in the first movement gives way to a more relaxed, resigned, though still noble second movement. Here we find some of Brahms’s most exquisite solo writing, which includes a serenely lyrical theme for the oboe, followed a bit later by a plaintive narrative for the same instrument, and, towards the end of the movement, the same theme for oboe, horn and violin together in three different registers.

The third movement is a gracious *Allegretto* rather than a robust scherzo like Beethoven would have written. The mood is intimate, the emotions relaxed, the orchestral colors painted in pastels – all welcome qualities in anticipation of the tremendous emotional struggle about to be unleashed in the finale.

In the fourth movement, like the first, we again find an elaborate slow introduction presaging all thematic material to follow. If the first movement was grand, the last is grander still – the crown of the whole symphony. The wildly shifting moods (shades of the introduction to the finale of Beethoven’s Ninth) are dispelled by a glowing horn solo in C major, then by a chorale theme in the trombones (hitherto unused in the symphony!). The noble, march-like theme of the *Allegro* that follows has often been compared to that of Beethoven’s “Ode to Joy” tune. The epic drama that follows culminates in a return of the trombone chorale, now blared forth by the full orchestra. The symphony concludes in grandiose majesty. Glorious C major has triumphed over tragic C minor.

JOHANNES BRAHMS: Born in Hamburg, May 7, 1833; died in Vienna, April 3, 1897

Work composed: Begun probably 1862; composed mostly 1874-1876
 World premiere: November 4, 1876, in Karlsruhe conducted by Otto Dessoff
 Instrumentation: 2 flutes, 2 oboes, 2 clarinets, 2 bassoons, contra bassoon, 4 horns, 2 trumpets, 3 trombones, timpani, strings

Brahms: Symphony No. 2 in D major, Op. 73

After the massiveness and severity of the First Symphony, the idyllic, pastoral Second, with its wealth of singable melodies, made a strong popular appeal at its first performance on December 30, 1877 by the Vienna Philharmonic conducted by Hans Richter. “Suffused with the sunshine and the warm winds playing on the water,” were Richard Specht’s words to describe the symphony. “Bathed in a mellow glow of instrumental sound of which Brahms alone had the secret” (John Horton) and “the effortless flow of limpid thought and warm feeling” (Theodore Billroth) are just two more of the many tributes listeners have bestowed on this work.

Whereas Brahms had toiled for at least fourteen years over his First Symphony, the Second was written in the space of a mere three months during the summer of 1877. The warmly lyric and relaxed character, the gracefulness of the many melodies, and a positive outlook are all attributable in some measure to the charms of the south Austrian countryside. In its pastoral quality, many listeners find a parallel to Beethoven’s Sixth Symphony which, like Brahms’s Second, followed a grim, darkly serious and heroic symphony in C minor.

However, much like the First Symphony, the Second rode a rocky course towards critical acceptance in some cities. One smiles in amusement to read that, for example, in Leipzig, which first heard the symphony in 1880, a critic felt it was “not distinguished by inventive power.” Two years later, in Boston, the *Post* called it “coldblooded” and the *Traveler* proclaimed that the symphony lacked “a sense of the beautiful,” while in New York the *Post* (1887) called for a return of Anton Rubinstein’s *Dramatic Symphony* to replace Brahms’s “antiquated” music. So much for the perspicacity of critics!

Right from the very opening notes, the listener is caught up in the symphony’s gentle, relaxed mood. The first two bars also provide the basic motivic germs of the entire movement and for much of the material in the other movements as well. The three-note motto in the cellos and basses and the following arpeggio in the horns are heard repeatedly in many guises – slowed

1
July2
July4
July

down, speeded up, played upside down, buried in the texture or prominently featured. All the principal themes of the movement are derived from these motto-motifs. The second theme is one of Brahms's most glorious, sung by violas and cellos as only these instruments can sing.

The second movement is of darker hue and more profound sentiment. The form is basically an A-B-A structure, with a more agitated central section in the minor mode. Throughout the movement, the listener's attention is continually focused as much on the densely saturated textures as on the themes.

The genial, relaxed character returns in the third movement, not a scherzo as Beethoven would have written, but a sort of lyrical intermezzo, harking back to the gracious eighteenth-century minuet. The forces are reduced to almost chamber orchestra levels, and woodwinds are often the featured sonority. This movement proved so popular at its premiere that it had to be repeated.

The forthright and optimistic finale derives heavily from the melodies of the first movement, though, as usual with Brahms, this material is so cleverly disguised that one scarcely notices. The coda calls for special comment. Brahms usually made scant use of trombones and tuba, writing for these instruments with skill but also with reserve. Yet from time to time he calls upon them for stunning effects, and one such moment occurs in the Second Symphony's coda, a passage as thrilling for audiences as it is for trombonists, every one of whom looks forward to a role in bringing this joyous work to its jubilant conclusion.

Work composed: 1877 **World premiere:** December 30, 1877, in Vienna by the Vienna Philharmonic conducted by Hans Richter
Instrumentation: 2 flutes, 2 oboes, 2 clarinets, 2 bassoons, 4 horns, 2 trumpets, 3 trombones, tuba, timpani, strings

Formerly a horn player in the Montreal Symphony, **Robert Markow** now writes program notes for orchestras as well as for numerous other musical organizations in North America and Asia. He taught at Montreal's McGill University for many years, has led music tours to several countries, and writes for numerous leading classical music journals.

2021 Season Subscription Concerts Lineup

Join us for the ultimate concert experience of our concert series below. For details, please access our website! <https://www.tpo.or.jp/en>

September

Thu. Sep 16, 19:00
at Tokyo Opera City Concert Hall

Fri. Sep 17, 19:00 at Suntory Hall

Sun. Sep 19, 15:00
at Bunkamura Orchard Hall

conductor : Myung-Whun Chung

Single tickets available

— All Brahms' Symphonies —

Brahms:

Symphony No. 3 in F major, Op. 90

Symphony No. 4 in E minor, Op. 98



November

Mon. Nov 1, 19:00 at Suntory Hall

Wed/Holiday Nov 3, 15:00
at Bunkamura Orchard Hall

Thu. Nov 4, 19:00
at Tokyo Opera City Concert Hall

conductor : Andrea Battistoni
flute: Tommaso Benciolini

Single tickets available

— Japan Premier of Battistoni's Flute Concerto —

Battistoni:

Flute Concerto "*The Garden of Delights*"
(Japan Premiere)

Tchaikovsky :

Symphony No. 5 in E minor, Op. 64



Inquiries about tickets: Tokyo Phil Ticket Service

tel: 03-5353-9522 (weekdays 10:00 - 18:00, closed on weekends and holidays)

Infection Control at Tokyo Phil

In our concerts, we assign top priority to the safety and health of all those involved, including the audience, the performers, and the staff members. From rehearsal to performance, we have been taking measures on stage, backstage, in dressing rooms, and in audience lobbies in accordance with the guidelines for the prevention of the spread of new coronaviruses published by the government of Japan, the Tokyo Metropolitan Government, and other related organizations.



We request that our audience disinfect their hands before entering the venue and maintain social distance with each other in lining up.



The audience's temperature is checked with a thermography camera and so on.



In order to avoid crowding when entering and exiting the hall, we ask that you enter and exit the hall by staggered times. Thank you for your cooperation.

If the attendee who comes to the venue is different from the purchaser of the ticket, we request to fill out the attendee's contact information in the ticket stub. The contact information will be kept under lock and incinerated one month after the performance.

Photo by K. Miura / Takafumi Ueno



Face Masks
Required



Physical
Distancing



Sanitizing
Stations



Frequent Cleaning
and Disinfecting



Improved Indoor
Ventilation

Please wear a mask at all times in the hall.

Please refrain from talking in the lobby or in the auditorium.

Please keep ample distance between audience members in the lobby.

Please disinfect your hands frequently.

Our staff will disinfect and wipe down the venue.

Adequate ventilation is provided in the auditorium.

Please cooperate with staggered entry and exit.

東京フィルだより — 2021年シーズン今後の定期演奏会

9月の定期演奏会

9月16日(木) 19:00
東京オペラシティ コンサートホール

9月17日(金) 19:00
サントリーホール

9月19日(日) 15:00
Bunkamuraオーチャードホール

指揮：チョン・ミョンフン(名誉音楽監督)

— ブラームス 交響曲の全て —

ブラームス／交響曲第3番

ブラームス／交響曲第4番



11月の定期演奏会

11月1日(月) 19:00
サントリーホール

11月3日(水・祝) 15:00
Bunkamuraオーチャードホール

11月4日(木) 19:00
東京オペラシティ コンサートホール

指揮：アンドレア・バッティストーニ(首席指揮者)

フルート：トンマーゾ・ベンチョリーニ*

— バッティストーニの作品 —

バッティストーニ／フルート協奏曲『快楽の園』

～ボスの絵画作品によせて* (2019) (日本初演)

チャイコフスキー／交響曲第5番



【料金】SS¥15,000 S¥10,000 A¥8,500 B¥7,000 C¥5,500

*残席状況は東京フィルチケットサービスまでお問合せください。

お申込み・お問合せは
東京フィルチケット
サービスまで

03-5353-9522 (平日10時～18時／土日祝休)

<https://www.tpo.or.jp/> (24時間受付・座席選択可)

次回9月定期の聴きどころ



名誉音楽監督 マエストロ チョン・ミョンフンが語る ブラームス 交響曲の全て

取材・文：柴田克彦

2001年以来、東京フィルハーモニー交響楽団にポストを持つ現・名誉音楽監督のチョン・ミョンフン。同楽団と親密な関係を築くマエストロに、ポスト就任20年の思いや2021年の定期演奏会について話を聞いた。

*本インタビューは2020年12月に実施した取材によるものです。

——この20年の間に東京フィルとの関係はどう変化してきましたか？

「東京フィルとは20年間、常にポジティブな関係を続けてきました。これはある意味奇跡的なことです。人との関係において最良の到達点は“信頼”だと思います。お互いが相手の事を考え、疑いがどんどん無くなっていく。ただ、そこに至るまでには時間と段階を要します。まずはプロフェッショナルなレベル、そしてそれがうまく行った次に良いプロフェッショナルなレベル、最後にパーソナルな関係です。私は今、東京フィルのメンバー一人ひとりに対してこころから幸福を願い、愛情を感じています」。

——現在の東京フィルのキャラクターをどう捉えていますか？

「難しい質問なので、個人的な答えを言うと『東京フィルは自分のことを理解してくれる』。大したことではないように聞こえるかもしれませんが、これはプロの世界では滅多にありません。

指揮者はまずテンポなどの基本的なことを腕の動きで分かってもらう必要があります。そして、できれば腕を見て自分の心を分かしてほしいと思っています。しかしそれはとても難しく時間がかかります。そうした意味で、東京フィルへの最高の賛辞として『自分のことをよく分かってくれてありがとう』と感謝したいと思います」。

——2021年は東京フィルにとってどんなシーズンにすべきとお考えですか？

「私の音楽上の目標が一つだけあります。それは『昨日よりも少しより良く演奏すること』です」。

——7月と9月の定期はブラームスの交響曲全曲演奏ですね。2009年にも東京フィルで全曲演奏をされていますが、今このチクルスを行う理由は？ また前回と今回ではどんな違いが生まれるとお考えですか？

「私は以前よりもさらに勉強しています。先ほども言った『少しでも昨日より良く演奏すること』は、段々楽になるのではなく、逆に難しくなっていくので、もっと勉強しなければならなくなるのです。本当の試金石は『より良く演奏したい』という意思を持てるかどうか。そして作品があまりに偉大なので、作品への愛がより良く演奏するよう、より深く勉強するよう要求します。



2009年のブラームス交響曲チクルスより

©三好英輔

ただこうした例もあります。私は昔、ブラームスの4番を非常に難しいと感じていました。しかしある日、なぜか楽になったように感じたのです。その時私は、ブラームスが4番を書いた歳、53歳になっていました。そこで気づいたのはすべての人間が色々な共通項を持っているということ。もちろん天才には特別な部分がたくさんありますが、共通項もあります。53年間生きてきたら他の53年間生きてきた人と共通項があり、23年生きてきた人にはできないことができる。以来第4番との関係が深まりました」。

—— マエストロが思うブラームスの交響曲の特徴や魅力、さらには全曲を聴く意味をお聞かせください。

「ブラームスは交響曲第1番の作曲に長い時間をかけたので、発表した時にはすでに十分経験を積んだ作曲家になっていました。従って4曲に大きな音楽的違いはないのですが、それでも違いがある。



私は時々、この曲は何の動物に当たるだろう? と考えます。1番は力を持ったライオン、しかし4番は何か? 先見の明で知られるシューマンがブラームスについて言ったのは『世界は鷲を見つけた』でした。交響曲第4番の第4楽章に至った時、ブラームスは遂に空へ飛翔する力を身につけます。もはやライオンではなく鷲なのです。1番は物理的に力強いが、4番では心が飛翔する。1番から4番に向かって素晴らしい弧が描かれていると思います。ですので、1番から4番まで聴いて、物理的な状態から心が高揚するレベルに跳躍する過程を辿るのはとても興味深いと思います」。

—— マエストロにとってブラームスはどんな存在ですか?

「学生の頃は、白く長い髭を生やした有名なブラームスの肖像を見ていたので、ゆっくりした重たい音楽を書くお爺さんだと思っていました。しかし今ではまったく違うイメージを抱いています。彼には動物的な野蛮人の面、知性や芸術以前に内側で燃えている生の力があるのです。私にとってブラームスの音楽は、突き破って飛び立つのを待っているような燃える情熱です。多くの物事の熾烈さは一殊に音楽においては一ある種の苦闘から生まれると思っています。例えば種子の中から外に出ようとしているエネルギーは膨大なものです。その種子が天才の中にあるものだったら、どんなエネルギーが解き放たれるのか想像に難くありません。これ

がブラームスについていつも感じることであり、内面の熾烈さにおいて彼を凌ぐと
感じられる作曲家はベートーヴェンだけです」。

——最後に日本のお客様へのメッセージを。

「東京フィルは東京の私の家族ですが、20年経った今、お客様もはや無名の
観客ではありません。私にとっては友だちに向けて演奏している感覚です。です
から日本の友人の皆様にもまたお目にかかるのを楽しみにしています。

私たちを支えてくれているすべての人に感謝を伝えるために自分は音楽をやっ
ている。私が友だちのために演奏する時、感謝を表そうとしている。本当にそう
だ。それが私の唯一のメッセージです。ありがとう、どうぞお元気で、2021年が皆
様にとって本当に素晴らしい年になりますように」。

マエストロの東京フィルへの深い愛情と含蓄のある話に触れると、コンサ
ートがますます楽しみになってくる。東京フィルとの20年のコラボの成果が詰
まった、ブラームスの交響曲全曲の公演にぜひとも足を運びたい。

ぶらあぼ ONLINE ANNEX

東京フィルハーモニー交響楽団 2021シーズンより抜粋・転載

<https://ebravo.jp/tpo/archives/4208>



9月定期演奏会 公演情報

9月16日(木) 19:00 東京オペラシティ コンサートホール

9月17日(金) 19:00 サントリーホール

9月19日(日) 15:00 Bunkamuraオーチャードホール

指揮: チョン・ミョンファン(名誉音楽監督)

— ブラームス 交響曲の全て —

ブラームス／交響曲第3番、交響曲第4番

チケット料金、問合せ先等詳細は19ページをご覧ください。



©上野隆文

2021シーズン 午後のコンサート。 今後のラインナップ

今季もご好評いただいております、2021シーズンの東京フィル「渋谷／平日／休日の午後のコンサート」1回券は10月公演まで発売中です（残席状況はそれぞれ東京フィルチケットサービスやウェブサイトなどでご確認ください）。

2021シーズンも、名曲と楽しいお話で充実の午後のひとときをお届けします。

※最優先＝賛助会員・定期会員様
優先＝東京フィルフレンズ会員様

1回券発売日

7～10月公演 発売中

11月～2022年2月公演

最優先 8/21(土)
優先・WEB優先 8/28(土)
(WEB優先は9/6(月)23時59分まで)
一般 9/7(火)

チケット料金(各シリーズ共通)(税込)

1回券	S席	A席	B席	C席
定価	¥5,700	¥4,600	¥3,100	¥2,100
東京フィルフレンズ	¥5,130	¥4,140	¥2,790	¥1,890



イラスト：ハラダチエ

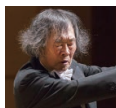
“大人の渋谷” Bunkamuraで楽しむ 渋谷の午後のコンサート

Bunkamura オーチャードホール

9月7日(火) 第11回

指揮とお話：小林研一郎

1回券
発売中



コパケンのチャイコフスキークライマックス!!

チャイコフスキー／
歌劇『エフゲニー・オネーギン』よりポロネーズ
弦楽セレナードより第1楽章
交響曲第6番『悲愴』より第3楽章
交響曲第5番より第2楽章
交響曲第4番より第4楽章

ほか

11月2日(火) 第12回

指揮とお話：
アンドレア・バッティストーニ



バッティストーニの運命

1回券8月発売

ヴェルディ／歌劇『運命の力』序曲
ヴォルフ＝フェラーリ／歌劇『マドンナの宝石』間奏曲
ブッチーニ／歌劇『マノン・レスコー』間奏曲
ボンキエッリ／歌劇『ラ・ジョコンダ』より「時の踊り」
ベートーヴェン／交響曲第5番『運命』

photo: 小林研一郎©山本倫子 アンドレア・バッティストーニ©Takafumi Uen

ゆったりと、平日午後に“音楽のご褒美” 平日の午後のコンサート 東京オペラシティ コンサートホール

7月27日(火) 第22回

指揮とお話:尾高忠明



1回券
発売中

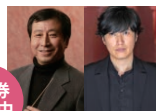
テンポはマーチ

古関裕而／スポーツショー行進曲
J.F. ワグナー／行進曲「双頭の鷲の旗の下に」
スーザ／行進曲「星条旗よ永遠なれ」
レスピーギ／交響詩『ローマの松』より
「アッピア街道の松」

ほか

10月21日(木) 第23回

指揮とお話:円光寺雅彦
ピアノ:清塚信也*



1回券
発売中

忘れ難きふるさと

グリーグ／
劇付随音楽『ペール・ギュント』より
「朝～山の魔王の宮殿にて」
ラフマニノフ／パガニーニの主題による狂詩曲*
ドヴォルザーク／交響曲第9番『新世界より』

2022年2月3日(木) 第24回

指揮とお話:三ツ橋敬子
ピアノ:仲道郁代*



photo: 尾高忠明©Martin Richardson 円光寺雅彦©K.Miura 三ツ橋敬子©大杉隼平 仲道郁代©Kiyotaka Saito(SCOPE)

夢を語りますか

1回券8月発売

リスト／ハンガリー狂詩曲第2番
ショパン／アンダンテ・スピアナートと
華麗なる大ポロネーズ*
ハチャトゥリアン／劇音楽『仮面舞踏会』よりワルツ
チャイコフスキー／幻想序曲『ロメオとジュリエット』

元祖! 22年目を迎える“ご長寿”シリーズ 休日の午後のコンサート 東京オペラシティ コンサートホール

9月5日(日) 第89回

指揮とお話:小林研一郎



1回券
発売中

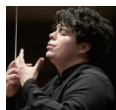
コバケンのチャイコフスキークライマックス!!

チャイコフスキー／弦楽セレナードより第1楽章
バレエ組曲『くるみ割り人形』より
「行進曲～トレバック～花のワルツ」
交響曲第6番『悲愴』より第3楽章
交響曲第5番より第2楽章
交響曲第4番より第4楽章

ほか

11月7日(日) 第90回

指揮とお話:
アンドレア・バッティストーニ



バッティストーニの運命

1回券8月発売

ヴェルディ／歌劇『運命の力』序曲
ヴォルフ＝フェラーリ／歌劇『マドンナの宝石』間奏曲
ブッチェーニ／歌劇『マノン・レスコー』間奏曲
ボンキエッリ／歌劇『ラ・ジョコンダ』より「時の踊り」
ベートーヴェン／交響曲第5番『運命』

2022年2月6日(日) 第91回

指揮とお話:三ツ橋敬子
ピアノ:仲道郁代*



photo: 小林研一郎©山本倫子 アンドレア・バッティストーニ©Takafumi Ueno 三ツ橋敬子©大杉隼平 仲道郁代©Kiyotaka Saito(SCOPE)

テーマは愛

1回券8月発売

リスト／ハンガリー狂詩曲第2番
ショパン／アンダンテ・スピアナートと
華麗なる大ポロネーズ*
ハチャトゥリアン／劇音楽『仮面舞踏会』よりワルツ
チャイコフスキー／バレエ組曲『白鳥の湖』より

お申し込み・お問合せ 東京フィルチケットサービス

Tel 03-5353-9522 (10時～18時・土日祝休・発売日の土曜日のみ10時～16時)

URL www.tpo.or.jp/

Photo Reports 2021年6月の演奏会より

6月の演奏会は、桂冠指揮者・尾高忠明を迎えての5公演。長寿シリーズ「休日の午後のコンサート」と、3年めを迎えて好調の「渋谷の午後のコンサート」では、〈名曲には名シーン〉と題し、「小さい頃は映画監督になりたかった」というマエストロ尾高の幅広いお話とともに古今の名作映画に使われた名曲をお届けしました。

そして6月定期演奏会では、ピアニスト上原彩子さんを迎えてのオール・ラフマニノフ・プログラム。難曲「バガニーニの主題による狂詩曲」とマエストロの十八番とも言える「交響曲第2番」、3公演で滋味深く静かな情熱を湛えた演奏をお届けしました。

写真=東京フィル／中崎史史

第88回 休日の午後のコンサート(6/6)

第10回 渋谷の午後のコンサート(6/9)

〈名曲には名シーン〉

指揮とお話：尾高忠明(桂冠指揮者)

コンサートマスター：依田真宣

R.シュトラウス／交響詩『ツァラトゥストラはかく語りき』より
J.ウィリアムズ／映画『シンドラのリスト』よりテーマ
S.フェイン(ボブ佐久間 編)／映画『慕情』より「慕情」
マーラー／交響曲第5番より第4楽章アダージェット
E.バーンスタイン(宮川彬良 編)／映画『荒野の七人』より
ワーグナー／楽劇『ワルキューレ』より「ワルキューレの騎行」
スタイナー／映画『風と共に去りぬ』より「タラのテーマ」
マンシーニ(ボブ佐久間 編)／

映画『ティファニーで朝食を』より「ムーン・リバー」
ストラヴィンスキー／バレエ組曲『火の鳥』(1919年版)



ジョン・ウィリアムズ「シンドラのリスト」ではコンサートマスター依田真宣がソロをつとめました



東京オペラシティコンサートホールでの長寿シリーズ「休日の午後のコンサート」2021シーズン、無事に開幕となりました



「渋谷の午後のコンサート」より。今季NHK大河ドラマで放送されている「青天を衝け」主人公の渋沢栄一を曾祖父にもつマエストロ。「小学生のときに母から『渋沢栄一はあなたのひいおじいさんよ』と聞かされてびっくり仰天」とエピソードを語り、会場の笑いを誘いました。

6月定期演奏会(6/17、18、20)

指揮：尾高忠明(桂冠指揮者)

ピアノ：上原彩子*

コンサートマスター：近藤 薫

— 復活を遂げた作曲家 —

ラフマニノフ／パガニーニの主題による狂詩曲*

【ソリスト・アンコール】

ラフマニノフ／前奏曲 Op. 32-5(6/17)、10の前奏曲 Op. 23-4 (6/18)、

10の前奏曲 Op. 23-5 (6/20)

ラフマニノフ／交響曲第2番



上原彩子さんをソリストに迎えての「パガニーニの主題による狂詩曲」。オーケストラとの複雑な掛け合いも鮮やかに、ピアニストでもあったラフマニノフ後期の代表曲をお届けしました



マエストロ尾高と東京フィルの「2番」は7年ぶり。指揮者とオーケストラの長い関係を感じさせる演奏となりました



メインはマエストロの“十八番”「交響曲第2番」。ラフマニノフの複雑な音楽を纏綿と練り上げた演奏で、3公演で長いカーテンコールをいただきました

メンバー活動情報 コンサートマスター三浦章宏、初のソロ・アルバム ベートーヴェン：ヴァイオリン・ソナタ集I《クロイツェル》好評発売中!

東京フィル コンサートマスター・三浦章宏が自身初のソロ・アルバムでベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタ全集録音をスタート。長年の知己であるピアニスト東誠三とのタッグで、第1集には大曲の第9番『クロイツェル』、第6番、第1番を収録。

「ずっと作りたかったCDを、還暦手前にしてようやく形にすることができました。最も敬愛する作曲家、ベートーヴェンの珠玉のソナタ全曲録音を目指し、まずは第1、6、9番をお届けします。

ベートーヴェンの不屈の精神と人間性に尊敬と共感を抱きつつ、自分自身の音楽人生と向き合ったアルバムになっております。ぜひともお手にとっていただけましたら幸いです」(三浦)



出演 三浦章宏(ヴァイオリン)、東誠三(ピアノ)

収録曲 ベートーヴェン

ヴァイオリン・ソナタ第9番 イ長調 Op.47
『クロイツェル』

ヴァイオリン・ソナタ第6番 イ長調 Op.30-1

ヴァイオリン・ソナタ第1番 ニ長調 Op.12-1

価格 ¥3,000 (税込) [AMCD-0001]

メンバー活動情報 オーボエ奏者 故・三谷真紀さん 演奏動画公開

今年2月、病気のため残念ながら逝去された東京フィル オーボエ奏者・三谷真紀さんが生前2020年10月に収録した、オーボエダモーレのソロ演奏動画が公開されました。オーボエダモーレのための初めてのオリジナル作品である「空と海の彼方へ」(高嶋圭子作曲)の楽譜出版を機に収録されたこの動画は、Youtubeの「フォスターミュージックチャンネル」からご覧いただけます。

URL https://www.youtube.com/watch?v=CaozSsbQ_jU



演奏会場の感染対策について

演奏会の再開にあたり、リハーサルから本番に至るまで、お客様、出演者、スタッフ等、すべての関係者の安全と健康を最優先に、日本国政府・東京都および関係団体から発表された新型コロナウイルス感染拡大防止のためのガイドラインに従い、舞台上・舞台裏・楽屋・客席ロビーなどにおける対策を講じております。引き続きの感染症予防のご協力をお願い申し上げます。

写真＝三浦興一／上野隆文

客席・ロビーの対策について



入場前の手指消毒、常時マスク着用、間をあけて整列をお願いいたします



入場の際に、サーモグラフィカメラ等での検温を行っています



ホール入退場時の密集を避けるため、時間差による入退場のご協力をお願いいたします

ご来場者様の中から感染者が発生した場合には、保健所等の公的機関と連携の上、ご購入の際に取得した購入者情報を緊急連絡先として使用させていただく場合がございます。チケットご購入者をご来場者が異なり、購入者情報を緊急連絡先として望まない場合は、必ずチケット半券裏面の余白にご来場者様のお名前と緊急連絡先(電話番号など)のご記入をお願いいたします。



Face Masks
Required



Physical
Distancing



Sanitizing
Stations



Frequent Cleaning
and Disinfecting



Improved Indoor
Ventilation

会場では常時マスクの着用をお願いいたします。

ロビーや客席内での会話はお控えください。

ロビー等ではお客様同士の間隔を十分におとりください。

頻回の手指消毒をお願いいたします。

場内はスタッフが消毒・清拭を行っています。

客席内は十分な換気を行っています。

時差入退場にご協力ください。

「モーツァルト」

北海道大学名誉教授
岸 道郎

東京フィルのゆかりの方々に、クラシック音楽に魅了されたきっかけや音楽生活について綴っていただく本連載。第4回は、東京フィルの個人賛助会員（パートナー会員）としてご寄附くださっている岸 道郎様。北海道大学水産学部教授の任を終えた2013年から（現在は同・名誉教授）東京フィルへのご寄附を続けてくださっています。高校生時代クラシック音楽に目覚め、モーツァルトに傾倒していかれたお話から、海洋学者ならではの意外な音楽体験まで……幅広く綴っていただきました。

高校生のとき、風邪で寝込んでいてラジオを聞いていました。ハイドンとモーツァルトの聞き比べをしていました。その日までは「ピアノを習っていたくせに?!」、クラシック音楽には全く興味がなかったのです。ラジオで曲を聴いているうちに、ハイドンとモーツァルトをすぐに聞き分けられるようになりました。で、その日をきっかけにモーツァルトが大好きになり、最初買ったレコードは交響曲40、41番。これすらレコードを買うまで聴いたことがなかったのです。でも、これをきっかけにモーツァルトの交響曲やピアノ協奏曲のレコードを買いまくりました。

定年退職したのを機に、2014年から「あこがれていたい」ザルツブルク音楽祭に行っています。これも、行くまでモーツァルト以外のオペラがあんなに沢山上演されるのを知りませんでした（こんな私がここに文章を書かせていただいてよいのでしょうか?）。モーツァルトのオペラで印象に残っているのは2018年の『魔笛』の演出です。レチタティーヴォのところでは、語り部（クラウス・マリア・



初めて買ったレコードはカル・ベーム指揮ベルリン・フィルによるモーツァルト

ブランダウアー/Klaus Maria Brandauer。有名な俳優らしいですね）が、子供達に物語を話しかける演出（リディア・シュタイアー / Lydia Steier）でした。ザルツブルク、去年は行けませんでしたけど今年はどうでしょう。この文章を書いている5月末現在、オーストリアは観光客を受け入れていません。チケットは買ってしまったのですが……。



2018年8月ザルツブルクにて

もうひとつ、札幌から実家のある東京へ戻ってきました。札幌はプロのオーケストラはひとつしかないのですが、東京には山のようにあります。東京フィルに寄附をするきっかけは、新国立劇場のオペラですね。東京フィルと新国立劇場と両方に寄附をするようになりました。

閑話休題：私は海洋学を専攻していましたが、船酔いをするので「有名」でした。そこで、海の音楽、例えばドビュッシーの「交響詩《海》」、イベールの「海の交響曲」、ブリテンの「4つの海の間奏曲」などを聴くと船酔い気分になってしまうので、あまり好きな曲ではないのです。もっとも船酔いを印象づけるような「名曲」なのでしょうね。海に関連する題名のついているクラシック音楽は意外と少ないです（メンデルスゾーン：序曲「静かな海と楽しい航海」は船の曲だと思っています）。作曲家が内陸部に住んでいる人が多かったせいでしょうか？ ところで、天文学者はホルストの「惑星」やヨゼフ・シュトラウスの「天体の音楽」はお好きなのでしょうか？



1905年に出版されたドビュッシーの交響詩『海』初版スコアの表紙。葛飾北斎の浮世絵『富嶽三十六景』のひとつ「神奈川沖浪裏」にインスピレーションを得て生まれたとも言われます。荒れ狂う海の描写は船酔いする海洋学者には刺激が強すぎる？

岸道郎（かし・みちお）

1949年東京生まれ、1978年東京大学大学院理学系研究科博士課程修了。1983年農学博士（東京大学）取得。東京大学海洋研究所助手、北海道大学水産学部教授など歴任。2013年～北海道大学名誉教授。日本海洋学会賞、水産海洋学会宇田賞など受賞。

七夕の短冊が風に揺られ、盛夏の訪れを感じさせる季節となりました。

皆様におかれましてはご健勝のことと存じます。

今月は、就任20周年を迎えるマエストロ、チョン・ミョンフンと楽団が奏でる、

軽やかで繊細、かつダイナミックな演奏をお楽しみください。

引き続きご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。



東京フィルハーモニー交響楽団 理事長 三木谷 浩史

賛助会

東京フィルハーモニー交響楽団の活動は、皆様のご寄附により支えていただいております。

ここに法人ならびに個人賛助会員（パートナー会員）の皆様のご芳名を掲げ、

改めて御礼申し上げます。

オフィシャル・サプライヤー（敬称略）

ソニーグループ株式会社	代表執行役 会長 兼 社長 CEO	吉田 憲一郎
楽天グループ株式会社	代表取締役会長兼社長	三木谷 浩史
株式会社マルハン	代表取締役会長	韓 昌祐
株式会社ロッテ	代表取締役社長執行役員	牛腸 栄一
株式会社ゆうちょ銀行	取締役兼代表執行役社長	池田 憲人

法人会員

賛助会員（五十音順・敬称略）

(株)IHI	代表取締役社長 井手 博	ANAホールディングス(株)	代表取締役社長 片野坂 真哉
(株)アイエムエス	取締役会長 前野 武史	(株)NHKエンタープライズ	代表取締役社長 安齋 尚志
相澤内科医院	理事長 相澤 研一	桜美林大学	総長 大越 孝
アイ・システム(株)	代表取締役会長 兼 社長 松崎 務	大塚化学(株)	特別相談役 大塚 雄二郎
(株)アシックス	代表取締役会長CEO 尾山 基	(株)オーディオテクニカ	代表取締役社長 松下 和雄
(株)インターテクト	代表取締役 海野 裕	(公財)オリックス宮内財団	代表理事 宮内 義彦

花王(株)	代表取締役 社長執行役員	長谷部 佳宏	トッパン・フォームズ(株)	代表取締役社長	坂田 甲一
カシオ計算機(株)	代表取締役 社長 CEO	樫尾 和宏	トヨタ自動車(株)	代表取締役社長	豊田 章男
キャノン(株)	代表取締役会長兼社長 CEO	御手洗 富士夫	DOWAホールディングス(株)	代表取締役社長	関口 明
(株)グリーンハウス	代表取締役社長	田沼 千秋	(株)ニチケアパレス	代表取締役社長	秋山 幸男
コスモエネルギーホールディングス(株)	代表取締役社長 社長執行役員	桐山 浩	(株)ニフコ	代表取締役社長	柴屋 雅春
サントリーホールディングス(株)	代表取締役社長	新浪 剛史	日本ライフライン(株)	代表取締役社長	鈴木 啓介
信金中央金庫	理事長	柴田 弘之	(株)パラダイスインターナショナル	代表取締役	新井 秀之
新菱冷熱工業(株)	代表取締役社長	加賀美 猛	富士電機(株)	代表取締役社長	北澤 通宏
(株)J.Y.PLANNING	代表取締役	遅澤 准	(株)不二家	代表取締役社長	河村 宣行
(株)滋慶	代表取締役社長	田仲 豊徳	(株)三井住友銀行	頭取CEO	高島 誠
(株)ジーヴァエナジー	代表取締役社長	金田 直己	三菱商事(株)	代表取締役社長	垣内 威彦
菅波楽器(株)	代表取締役社長	菅波 康郎	三菱倉庫(株)	相談役	宮崎 毅
相互物産(株)	代表取締役会長	小澤 勉	(株)三菱UFJ銀行	特別顧問	小山田 隆
ソニーグループ(株)	代表執行役 会長 兼 社長 CEO	吉田 憲一郎	ミライババイオサイエンス(株)	代表取締役	田中 めぐみ
ソニー生命保険(株)	代表取締役社長	萩本 友男	(株)明治	代表取締役社長	松田 克也
(株)ソニーミュージックエンタテインメント	代表取締役社長CEO	村松 俊亮	森ビル(株)	代表取締役社長	辻 慎吾
(株)大丸松坂屋百貨店	代表取締役社長	澤田 太郎	ヤマトホールディングス(株)	代表取締役社長	長尾 裕
都築学園グループ	総長	都築 仁子	(株)山野楽器	代表取締役社長	山野 政彦
東急(株)	取締役社長	高橋 和夫	ユニオンツール(株)	代表取締役会長	片山 貴雄
東京オペラシティビル(株)	代表取締役社長	三和 千之	楽天グループ(株)	代表取締役会長兼社長	三木谷 浩史
東レ(株)	代表取締役社長	日覺 昭廣	(株)リソー教育	取締役会長	岩佐 実次

後援会員

(株)アグレックス	代表取締役社長	畠森 達朗	(株)トレミール	代表取締役	茶谷 幸司
欧文印刷(株)	代表取締役社長	和田 美佐雄	(株)日税ビジネスサービス	代表取締役会長兼社長	吉田 雅俊
(有)オルテンシア	代表取締役	雨宮 睦美	富士通(株)	代表取締役社長	時田 隆仁
(医)カリタス菊山医院	理事長	加藤 徹	本田技研工業(株)	代表取締役社長	三部 敏宏
(医)だて内科クリニック	理事長	伊達 太郎	三菱地所(株)	執行役社長	吉田 淳一
(宗)東京大仏・乗蓮寺	代表役員	若林 隆壽	三菱電機(株)	執行役社長	杉山 武史
(一社)凸版印刷三幸会	代表理事	足立 直樹			

ご支援の御礼とお願い

今般の新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、2020年2月下旬より数か月にわたり東京フィルが出演する演奏会のすべてが中止・延期となりました。東京フィルの財源は演奏料収入がほとんどを占めるため、演奏会およびチケット収入の壊滅は団体存続の危機に直結いたします。そのような中、たくさんの励ましのお言葉とともに、チケット払戻し辞退や、コロナ禍における活動に対してのご寄附等、温かいご支援をいただいておりますこと、重ねて心より御礼申し上げます。

今後も、当団は、芸術がもたらす感動がどんな時代にも社会を豊かにするとの信念のもと、お客様ならびに関係者の安全と安心を最優先に、状況を注視しながら活動を継続してまいります。皆様のご寄附が大きな力となります。皆様におかれましては、改めて楽団を取り巻く状況についてご理解を賜りますとともに、いっそうのご支援・ご助力を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

弊団へのご寄附をいただけます際には、こちらの口座のいずれかにお振込みいただきましたら幸いです。1万円以上のご寄附をご検討いただける際は、賛助会（36ページ）も併せてご覧ください。

金融機関名	口座番号	口座名義
ゆうちょ銀行 (郵便振替)	00120-2-30370	公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団
三井住友銀行・ 東京公務部(096)	普通預金 3003239	

※ ご寄附の金額は自由に設定いただけます。

※ 振込手数料、通信費は恐れ入りますがご負担くださいますようお願い申し上げます。

※ 領収証書が必要な方は、お手数ですがお振込後に、別途配布しております「寄附申込書」に必要事項をご記入の上、下記へご送付ください。

寄附申込書のダウンロードはこちらからも取得いただけます。
https://www.tpo.or.jp/support/img/support_TPO.pdf



【ご支援のお問合せ／寄附申込書 送付先】

公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団・広報渉外部 寄附担当
 〒163-1408 東京都新宿区西新宿3-20-2 東京オペラシティタワー8階
 Fax 03-5353-9523 Eメール: partner@tpo.or.jp
 Tel 03-5353-9521 (土日祝日を除く10時～18時)

東京フィル 賛助会 会員募集中

2021年3月に東京フィルハーモニー交響楽団は創立110年を迎えました。

これまでの歩みは、東京フィルとその音楽を愛する皆様の日頃からの大きなご支援とご助力なしには実現しえないものでした。心より御礼申し上げます。

東京フィルは一年の始まりである1月をシーズンのスタートに据え、年間を通じて皆様の新しい暮らしに音楽をお届けしてまいります。国際的に活躍する音楽家や将来を嘱望される若い演奏家を招いての定期演奏会や「午後のコンサート」シリーズ、「第九」「ニューイヤーコンサート」などの特別演奏会や提携都市公演、学校や公共施設での音楽活動を通じ、東京フィルは社会に広くオーケストラの価値を認知いただけるよう活動を通じて、日本の芸術文化の発展に寄与し、今後ますます多様化するグローバル社会において心の豊かさを育み、文化交流の懸け橋となるよう、より一層努めてまいります。

ぜひとも皆様方からの継続的なご支援を賜りますよう、謹んでお願い申し上げます。

東京フィルハーモニー交響楽団

賛助会（法人／パートナー（個人））会員の種別

種別		年会費1口
オフィシャル・サプライヤー		詳細はお問い合わせください。
法人会員	賛助会員	50万円
	後援会員	30万円
パートナー会員	ワンハンドレッドクラブ	100万円
	フィルハーモニー	50万円
	シンフォニー	30万円
	コンチェルト	10万円
	ラプソディ	5万円
	インテルメッツォ	3万円
	プレリウド	1万円

※東京フィルハーモニー交響楽団は内閣府により「公益財団法人」に認定されており、ご寄附の金額に応じて税法上の優遇措置を受けることができます。その他特典、お申込みや資料請求など、詳しくは東京フィル広報渉外部担当へお問合せください。

寄附をご検討くださいます際には、主催公演会場「主催者カウンター」または東京フィル担当(partner@tpo.or.jp)までお尋ねください。資料をお送りいたします。ご入会後は、1年ごとに継続のご案内をお送りいたします。

【賛助会に関するお問合せ・お申込み】

東京フィルハーモニー交響楽団 広報渉外部（担当：星野^{かのまた}・鹿文）

電話：03-5353-9521（平日10時～18時） Eメール：partner@tpo.or.jp

皆様のご寄附は東京フィルの様々な活動を支えています。

フランチャイズ・ホール、事業提携都市との連携

東京フィルは、フランチャイズ・ホールであるBunkamuraオーチャードホール等での定期演奏会の他、東京都文京区、千葉県千葉市、長野県軽井沢町、新潟県長岡市の各地域と事業提携を結び、定期演奏会、親子のためのコンサートや中高生などへの楽器ワークショップ等、地域の皆様との交流を通じ音楽の魅力をお届けしています。

文化庁「文化芸術による子供育成総合事業 巡回公演事業」／「子供のための文化芸術体験機会の創出事業」

文化庁が主催する本事業は、日本全国の小中学校や特別支援学校を訪問し、一流の文化芸術団体による巡回公演を行っています。ワークショップ(少人数での事前指導)と、オーケストラによる本公演をお届けしています。国内オーケストラでは唯一、文化庁から5年間の長期採択を受け(2014～2018年度)、



小学校体育館でのオーケストラ本公演

東日本大震災地域を含む北海道・東北地区の小中学校99校、のべ43,361名の児童・生徒、地域の皆様と交流を行いました。2019年度は、これまでの訪問地域に加え、関東・東海地区の小中学校36校のべ16,000名以上の児童・生徒に音楽をお届けしました。

留学生の演奏会ご招待…留学生招待シート

東京フィルでは国際交流事業の一環として、海外からの留学生や研修員の方々を定期演奏会へご招待する「留学生招待シート」を設けており、皆様からご寄附いただいたチケットも有効に活用させていただきます。詳しくは次ページをご参照ください。



定期演奏会に来場のJICA東京研修生の皆様とチョンミョンフン(2019年7月東京オペラシティ定期) ©上野隆文

東日本大震災“とどけ心に”特別招待シート

東日本大震災により被災された皆様には、心よりお見舞い申し上げます。東京フィルでは2011年4月より、震災によりふるさとから避難されている方々を当団の公演にご招待しております。ご招待をご希望の方は、あらかじめ東京フィルチケットサービス(03-5353-9522)にご連絡いただき、公演当日、開演の60分前以降に公演会場の招待受付にお越しください。

ご来場いただけなくなった定期演奏会チケットのご寄附について

東京フィルでは、ご購入いただきながらご来場いただけなくなった定期演奏会のチケットをご寄附いただき「留学生招待シート」として活用させていただいてまいりました。新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、運用を見合わせておりましたが、2021年1月定期よりご案内を再開いたしました。お手元にご来場いただけない公演チケットがございましたら、ぜひ東京フィルへご寄附ください。大切にさせていただきます。

【お問合せ・お申込み】東京フィルチケットサービス

電話：03-5353-9522(10時～18時／土日祝休)

6月定期演奏会のチケットのご寄附をいただきました。
心より御礼申し上げます。

(五十音順・敬称略)

田中美穂 他、匿名希望6名

特別公演、公演協賛、広告のご案内

東京フィルハーモニー交響楽団は、様々な音楽活動を通して、企業様の大切な節目である周年記念事業や式典、福利厚生イベント等でご活用いただけるオンリーワンの特別企画を展開しております。

- 商品のプロモーションとして何か施策を考えたい
- 社内向けイベントで室内楽の演奏を企画したい
- 東京フィルの公演プログラムに広告を掲載したい
- 新製品、サンプルを会場で販売・配布したい

どうぞお気軽にご用命ください。



日中国交正常化45周年記念上海公演後のレセプションにて

【広告・協賛のお問合せ】東京フィルハーモニー交響楽団 広報渉外部

電話：03-5353-9521(平日10時～18時) Eメール：partner@tpo.or.jp

東京フィルハーモニー交響楽団

1911年創立。日本で最も長い歴史をもつオーケストラ。メンバー約160名、シンフォニーオーケストラと劇場オーケストラの両機能を併せもつ。名誉音楽監督チョン・ミョンフン、首席指揮者アンドレア・バッティストーニ、特別客演指揮者ミハイル・プレトニョフを擁する。Bunkamuraオーチャードホール、東京オペラシティ コンサートホール、サントリーホールでの定期演奏会や「渋谷／平日／休日の午後のコンサート」等の自主公演、新国立劇場等でのオペラ・バレエ演奏、『名曲アルバム』『NHKニューイヤーオペラコンサート』『題名のない音楽会』『東急ジルベスターコンサート』などの放送演奏の他、2020年にはドキュメンタリー番組『情熱大陸』や『NHK紅白歌合戦』にも出演。また、各地学校等での訪問コンサート等により、全国の音楽ファンに親しまれる存在として、高水準の演奏活動とさまざまな教育的活動を展開している。海外公演も積極的に行い、国内外から高い評価と注目を得ている。

1989年からBunkamuraオーチャードホールとフランチャイズ契約を結んでいる。東京都文京区、千葉県千葉市、長野県軽井沢町、新潟県長岡市と事業提携を結び、各地域との教育的、創造的な文化交流を行っている。

Tokyo Philharmonic Orchestra

In 2011, the Tokyo Philharmonic Orchestra celebrated its 100th anniversary as Japan's first symphony orchestra. With about 160 musicians, TPO performs both symphonies and operas regularly. TPO is proud to have appointed Maestro Myung-Whun Chung, who has been conducting TPO since 2001, as Honorary Music Director, Maestro Andrea Battistoni as Chief Conductor and Maestro Mikhail Pletnev as Special Guest Conductor.

TPO has established its world-class reputation through its subscription concert series, regular opera and ballet assignments at the New National Theatre, and a full, ever in-demand agenda around Japan and the world, including broadcasting with NHK Broadcasting Corporation, various educational programs, and tours abroad.

TPO has partnerships with Bunkamura Orchard Hall, the Bunkyo Ward in Tokyo, Chiba City, Karuizawa Cho in Nagano and Nagaoka City in Niigata.

Official Website / SNS <https://www.tpo.or.jp/>   



©上野隆文

東京フィルハーモニー交響楽団 1911年創立 楽団員

Tokyo Philharmonic Orchestra Since 1911 / Musicians

名誉音楽監督
Honorary Music Director

チョン・ヨンフン
Myung-Whun Chung

首席指揮者
Chief Conductor

アンドレア・バッティストーニ
Andrea Battistoni

桂冠指揮者
Conductor Laureate

尾高 忠明
Tadaaki Otaka

大野 和土
Kazushi Ono

ダン・エッティンガー
Dan Ettinger

特別客演指揮者
Special Guest Conductor

ミハイル・プレトニョフ
Mikhail Pletnev

アソシエイト・コンダクター
Associate Conductor

チョン・ミン
Min Chung

永久名誉指揮者
Permanent Honorary Conductor

山田 一雄
Kazuo Yamada

永久楽友・名誉指揮者
Permanent Member and
Honorary Conductor

大賀 典雄
Norio Ohga

コンサートマスター
Concertmasters

近藤 薫
Kaoru Kondo

三浦 章宏
Akihiro Miura

依田 真宜
Masanobu Yoda

第1ヴァイオリン
First Violins

小池 彩織☆
Saori Koike

榊原 菜若☆
Namo Sakakibara

坪井 夏美☆
Natsumi Tsuboi

柄本 三津子☆
Mitsuko Tochimoto

平塚 佳子☆
Yoshiko Hiratsuka

浅見 善之
Yoshiyuki Asami

浦田 絵里
Eri Urata

景澤 恵子
Keiko Kagesawa

加藤 光
Hikaru Kato

巖築 朋美
Tomomi Ganchiku

坂口 正明
Masaaki Sakaguchi

鈴木 左久
Saku Suzuki

高田 あきの
Akino Takada

田中 秀子
Hideko Tanaka

中澤 美紀
Miki Nakazawa

中丸 洋子
Hiroko Nakamaru

廣澤 育美
Ikumi Hirotsawa

弘田 聡子
Satoko Hirota

藤瀬 実沙子
Misako Fujise

松田 朋子
Tomoko Matsuda

第2ヴァイオリン
Second Violins

戸上 真里◎
Mari Togami

藤村 政芳◎
Masayoshi Fujimura

水島 路◎
Michi Mizutori

宮川 正雪◎
Masayuki Miyakawa

小島 愛子☆
Aiko Kojima

高瀬 真由子☆
Mayuko Takase

石原 千草
Chigusa Ishihara

出原 麻智子
Machiko Idehara

太田 慶
Kei Ota

葛西 理恵
Rie Kasai

黒沢 誠登
Makoto Kurosawa

佐藤 実江子
Mieko Sato

二宮 祐子
Yuko Ninomiya

本堂 祐香
Yuuka Hondo

山代 裕子
Yuko Yamashiro

吉田 智子
Tomoko Yoshida

吉永 安希子
Akiko Yoshinaga

若井 須和子
Suwako Wakai

渡邊 みな子
Minako Watanabe

ヴァイオラ
Violas

須田 祥子◎
Sachiko Suda

須藤 三千代◎
Michio Suto

高平 純◎
Jun Takahira

加藤 大輔○
Daisuke Kato

伊藤 千絵
Chie Ito

岡保 文子
Ayako Okayasu

曾和 万里子
Mariko Sowa

高橋 映子
Eiko Takahashi

手塚 貴子
Takako Tezuka

中嶋 圭輔
Keisuke Nakajima

蛭海 たづ子
Tazuko Hirumi

古野 敦子
Atsuko Furuno

村上 直子
Naoko Murakami

森田 正治
Masaharu Morita

チェロ Cellos	コントラバス Contrabasses	オーボエ Oboes	ホルン Horns	トロンボーン Trombones	ハープ Harps
金木 博幸◎ Hiroyuki Kanaki	片岡 夢児◎ Yumeji Kataoka	荒川 文吉◎ Bunkichi Arakawa	齋藤 雄介◎ Yusuke Saito	五箇 正明◎ Masaaki Goka	梶 彩乃 Ayano Kaji
服部 誠◎ Makoto Hattori	黒木 岩寿◎ Iwahisa Kuroki	加瀬 孝宏◎ Takahiro Kase	高橋 臣宜◎ Takanori Takahashi	中西 和泉◎ Izumi Nakanishi	田島 緑 Midori Tajima
渡邊 辰紀◎ Tatsuki Watanabe	小笠原 茅乃◎ Kayano Ogasawara	佐竹 正史◎ Masashi Satake	磯部 保彦 Yasuhiko Isobe	辻 姫子◎ Himeko Tsuji	ライブラリアン Librarians
黒川 実咲☆ Misaki Kurokawa	遠藤 柊一郎 Shuichiro Endo	杉本 真木 Maki Sugimoto	大東 周 Shu Ohigashi	石川 浩 Hirosaki Ishikawa	武田 基樹 Motoki Takeda
高麗 正史☆ Masashi Korai	岡本 義輝 Yoshiteru Okamoto	若林 沙弥香 Sayaka Wakabayashi	木村 俊介 Shunsuke Kimura	小田 愛美 Manami Oda	
広田 勇樹☆ Yuki Hirota	小栗 亮太 Ryota Oguri		田場 英子 Eiko Taba	平田 慎 Shin Hirata	ステージマネージャー Stage Managers
石川 剛 Go Ishikawa	熊谷 麻弥 Maya Kumagai	クラリネット Clarinets	塚田 聡 Satoshi Tsukada	山内 正博 Masahiro Yamauchi	
大内 麻央 Mao Ouchi	菅原 政彦 Masahiko Sugawara	チョ・スンホ◎ Sungcho Cho	豊田 万紀 Maki Toyoda	吉江 賢太郎 Kentaro Yoshie	稲岡 宏司 Hiroshi Inaoka
太田 徹 Tetsu Ota	田邊 朋美 Tomomi Tanabe	アレッサンドロ・ ベヴェラリ◎ Alessandro Beverari	山内 研自 Kenji Yamanouchi	チューバ Tubas	大田 淳志 Atsushi Ota
菊池 武英 Takehide Kikuchi	中村 元優 Motomasa Nakamura	万行 千秋◎ Chiaki Mangyo	山本 友宏 Tomohiro Yamamoto	大塚 哲也 Tetsuya Otsuka	古谷 寛 Hiroshi Furuya
佐々木 良伸 Yoshinobu Sasaki		黒尾 文恵 Fumie Kuroo	トランペット Trumpets	萩野 晋 Shin Ogino	
長谷川 陽子 Yoko Hasegawa	フルート Flutes	林 直樹 Naoki Hayashi			
渡邊 文月 Fuzuki Watanabe	神田 勇哉◎ Yuya Kanda		川田 修一◎ Shuichi Kawata	ティンパニ& パーカッション Timpani & Percussion	
	斉藤 和志◎ Kazushi Saito	ファゴット Bassoons	野田 亮◎ Ryo Noda	岡部 亮登◎ Ryoto Okabe	
	吉岡 アカリ◎ Akari Yoshikawa	チェ・ヨンジン◎ Young-Jin Choe	古田 俊博◎ Toshihiro Furuta	塩田 拓郎◎ Takuro Shiota	
	さかはし 矢波 Yanami Sakahashi	廣幡 敦子◎ Atsuko Hirohata	重井 吉彦 Yoshihiko Shigei	木村 達志 Tatsushi Kimura	
	下弘 桐子 Kiriko Shimobara	井村 裕美 Hiromi Imura	杉山 眞彦 Masahiko Sugiyama	鷹羽 香緒里 Kaori Takaba	
	名雪 裕伸 Hironobu Nayuki	桔川 由美 Yumi Kikkawa	前田 寛人 Hirohito Maeda	縄田 喜久子 Kikuko Nawata	
		森 純一 Junichi Mori		船迫 優子 Yuko Funasako	
				古谷 はるみ Harumi Furuya	

◎首席奏者
Principal○副首席奏者
Assistant Principal☆フオアシュピラー
Vorspieler

役員等・事務局・団友

役員等(理事・監事および評議員)

理事長	理事	監事	評議員
三木谷 浩史	浮舟 邦彦	岩崎 守康	伊東 信一郎
	大賀 昭雄	山野 政彦	海老澤 敏
副理事長	大塚 雄二郎		佐治 信忠
黒柳 徹子	小山田 隆		鈴木 勲
専務理事	篠澤 恭助		鈴木 啓介
石丸 恭一	田沼 千秋		瀬谷 博道
	寺田 琢		日枝 久
常務理事	遠山 敦子		南 直哉
工藤 真実	野本 弘文		
	韓 昌祐		
	平井 康文		
	宮内 義彦		

事務局

楽団長	公演事業部	ステージマネージャー	ライブラリアン	広報渉外部	総務・経理
石丸 恭一	市川 悠一	稲岡 宏司	武田 基樹	伊藤 唯	川原 明夫
	岩崎 井織	大田 淳志		鹿又 紀乃	鈴木 美絵
事務局長	大久保 里香	古谷 寛		千木 加寿子	
工藤 真実	大谷 絵梨奈			二木 憲史	
	佐藤 若菜			星野 友子	
	村尾 真希子			松井 ひさえ	
				安田 ひとみ	

団友

安藤 栄作	岡部 純	近藤 勉	瀬尾 勝保	長岡 愼	細川 克己
池田 敏美	小樽 敦子	今野 芳雄	高岩 紀子	長倉 穰司	細洞 寛
糸井 正博	小山 智子	齊藤 匠	高野 和彦	新田 清枝	本田 詩子
今井 彰	甲斐沢 俊昭	坂口 和子	高村 千代子	新田 伸雄	松澤 久美子
井料 和彦	加藤 明広	嵯峨 正雄	竹林 良	二宮 純	湊 貞男
岩崎 龍彦	加藤 博文	嵯峨 美穂子	竹林 陽子	野仲 啓之助	山屋 房子
植木 佳奈	金崎 真由美	桜木 弘子	田中 千枝	畑中 和子	吉田 啓義
上野 眞行	川人 洋二	笹 翠	田村 武雄	玻名城 昌子	米倉 浩喜
生方 正好	木村 友博	佐々木 等	津田 好美	福村 忠雄	脇屋 俊介
大兼久 輝実	黒川 正三	佐野 恭一	戸坂 恭毅	藤原 勲	
大和田 皓	河野 啓子	清水 真佐子	長池 陽次郎	古野 淳	

〈発行日〉2021(令和3)年7月1日 〈発行人〉石丸 恭一

〈発行所〉東京フィルハーモニー交響楽団

〒163-1408 東京都新宿区西新宿3-20-2 東京オペラシティタワー8F Tel 03-5353-9521 Fax 03-5353-9523

フランチャイズ・ホール: Bunkamuraオーチャードホール 提携: 千葉市 文京区 軽井沢町 長岡市

〈デザイン〉米田デザイン事務所 〈表紙画〉ハラダチエ 〈編集協力〉ひとま舎

〈印刷〉欧文印刷株式会社

©Tokyo Philharmonic Orchestra *無断転載を禁ず(非売品)

新しい景色をみたい

In Search of a New Scene